

島根県軟式野球連盟

—— これまでのあゆみ

昭和60年5月に諸先輩方のご尽力により「島根県野球連盟史」が発刊されているが、当初は硬軟一緒の組織から順次、社会の変換や野球界の諸事情等から、今の島根県軟式野球連盟となったことが諸先輩方の苦労話とともに詳しく記載されている。

それによると、当時の登録チーム数は一般少年併せて513であり、現在の登録チーム数の2倍の多さを数えている。

昭和57年「くにびき国体」における野球競技総合優勝の活躍は目を見張るものであり、その後数年にわたる国体での県代表チームの競技力の礎になったものと思われる。

平成25年には出雲大社の「平成の大遷宮」にも併せて、軟式野球の最高峰である「天皇賜杯」を初めて主管し、名誉総裁であられる高円宮妃久子殿下をお迎えして開催した。県内の野球関係者にとっては、大きな経験と達成感をもたらした大会であった。

学童では「乃木ライオンズ」が全日本学童軟式野球大会に連続出場し、平成4年には全国優勝。少年では令和3年の全国中学校軟式野球大会における「大田市立第二中学校」の全国優勝があり、全国でも野球人口が少ない本県ではあるが、特筆される素晴らしい活躍であった。

一般チーム（A級）としては「中筋グループ」が長年にわたり県内を引っ張り、国民体育大会、天皇賜杯等全国大会への出場権を掴んでいた。近年は「山陰合同銀行」と2強時代を築いていたが、最近は「山陰合同銀行」が全国への出場権を勝ち取ることが多くなってきている。

—— 現在の状況

NPB（日本野球機構）によれば平成24年の野球人口は155万人だったが令和4年には102万人と大きく減少している。

当県の全日本軟式野球連盟への登録チーム数も、一般・少年・学童の合計で令和2年279、令和3年272、令和4年268と漸減してきている。

学童で競技を開始して中学・高校・大学あるいは社会人として、一旦は硬式を経験しても生涯スポーツとして軟式野球を続けてもらい、後は指導者として地域に貢献いただくことがありがたいと思っているが、現状では少子高齢化による子どもの減少もある中で、軟式野球の人口減少には以下のような要因があると思っている。

- ①子どもたちのスポーツ競技に対する多様性・選択肢が広がっている。
- ②野球に親しむ環境が減っている（広場・公園でのキャッチボール禁止等）。

③野球用具の高額化及び学童・少年の保護者会組織の煩雑による負担が大きい。

④指導者による勝利至上主義からの指導方法やけがへの対応。

やはり、軟式野球に出会いそして競技の楽しさ、面白さ、チームワーク、礼儀、リスペクトを覚えながら、生涯スポーツ（学童・少年・一般・シニア・マスターズ・学童女子・中学女子）につなげていってほしい。

—— これから

現状の打開策として

- ①小学校低学年以下（保育年代含む）を対象に体験会（仮称）を開催し、保護者も含めて野球に対する理解と面白さを感じてもらおう。
- ②指導者にはチームの運営方法、ルール等を明確にして、保護者との話し合い等を行い、子どもたちが参加しやすい環境づくりに努める。
- ③指導者自らが研鑽して、指導力を高める為にJSBB公認学童コーチ（全日本軟式野球連盟）、JSPO公認コーチ（日本スポーツ協会）等の資格を取得して、本来の野球の面白さ、楽しさを伝承して、けが等への正しい対処方法を理解する。
- ④学童・少年・高校・実業団・プロ野球OB等の垣根を越えた野球教室等を実施して、一緒にやることで経験値の高い人から軟式野球の魅力、楽しさ、技術を教えてもらい、個々の目標形成に役立ててもらおう。

以上を実践する中で、学童から野球を始めてもらい、底辺の拡大、競技人口の増加を図りたい。またそれぞれの競技種目での大会等に積極的に参加していただける環境を作り、軟式野球を通しての各世代間の交流を図り、できうならば成果もあげていただき、競技者、保護者、指導者、関係者ともども喜べたら良いと思う。

一般では、2030年開催予定の島根かみあり国スポ、および前年の第33回西日本選手権（リハーサル大会）に向けて競技力向上の観点からも、今の2強でなく3強でも4強でも競い合う形を作り、できるだけ運営力、審判技術の向上を図りながら、本県の国民スポーツ大会競技得点を挙げることを競技団体としての当面の目標とした。

軟式野球は各年代に応じて競技が楽しめ、特に近年は女子チームによる学童、中学の全国大会も開催されていることから、当県も選抜チームで参加しており、生涯スポーツの観点からも「島根県軟式野球連盟」としての役割を果たしていきたいと考えている。